

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

不安

「いつから、そこに立っていたのだ」

彌兵衛は問いかけた。勘六の真意を量りかねていた。

「つい先程からでございます。父上が、あまりに熱心に仕事に打ち込んでおられますゆえ、声をかけるのも憚られました」

「そこで、何を致しておる」

「父上の仕事をお手伝いさせていたただきたく思つて参りました」

勘六の表情は真剣だった。

「手伝わなくとも良い。これは、他の者には、迷惑はかけんという、自分自身への約束だ、おまえには庄屋の仕事が山のようにあるだろう。しかし、せっかく来たのだから、少し、そこらで、休んで行ったらどうだ」

彌兵衛は言葉をかけた。

「父上、庄屋の仕事は、きちんと致しております。しかし、この岩を削ります仕事も庄屋にとって、村にとって、どんなに大切なことかという父上の気持ちが、やっと理解できたでございます。家の方は、五郎太がきちんと守っております。帰れと仰せられましても簡単に帰るわけには参りませぬ。どうぞ、父上の手伝いをさせて下さいませ」

「そなたも、なかなかの頑固者よのお」

「いえ、父上の足下にも及びません」

「アッハハハ」

「アハハハハ」

青空に父子の笑い声が響いた。

久々に心が通い合う父子の会話だった。

勘六と並んで岩を削りながら、彌兵衛はいちばん聞きたかったつるのことを言い出せず焦れたい思いをしていた。



画 高田勲

勘六は数日経っても鑿を持つ手が定まらず、側にいる彌兵衛をはらはらさせた。

「だめだ！気持ちばかりが焦り、父上の手伝いどころか、邪魔をするばかりだ」

勘六は腑甲斐無い自分を嘆いたが、その度に彌兵衛は、諭した。

「のう、勘六よ。昔はわしもそうじゃった。石工がの、石を削るには、石の心を知れ、と教えてくれたことがある。岩の心が解るまでに何十年かかったことか…。今では、岩の方から、ここを削ってくれと言つておるわ。焦ることは無い。おまえは、まだ若いのだからのお」

彌兵衛と勘六は並んで岩を削り、その岩を運んだ。どこから見ても、彌兵衛と勘六は、同じ目標に向かう、仲の良い幸せそうな父子に見えた。

けれども、彌兵衛には、ひとつ気がかりなことがあった。

それは、勘六が時折見せる寂しい表情と、仕事の手を休めなければならぬ程の激しい咳き込みだった。

「勘六、おまえ、体の調子を悪くしているのではなかるうのお？」

「父上、大丈夫でございます。風が少し冷たくなりましたゆえ…。父上のがんばりに比べましたら、私の腑甲斐無さが恥ずかしく思えます」「無理をするではないぞ」